

デンマーク黄金時代から考察されるキルケゴールとヘーゲルの関係
—初期キルケゴール思想におけるデンマークヘーゲル主義の影響史—

大坪哲也

本論文は、コペンハーゲン大学に入学した一八三〇年から『あれかこれか』を刊行する一八四三年二月までの青年キルケゴールの思想形成を、ヘーゲル哲学及びデンマークヘーゲル主義との影響関係の考察から、デンマークのヘーゲル主義的思想家としての初期のキルケゴール像を明らかにする。

第一部では、本研究の主題に入るための準備作業としてデンマーク黄金時代におけるヘーゲル哲学の影響史を紹介する。ここでは初期キルケゴール思想との関係で重要な思想家やさまざまな論争について、一定の見取り図を提供する。対象となるのは、一八二〇年代から一八四〇年代前半にかけての時期である。

第一章からは、キルケゴールのヘーゲル理解の前提として、J.L.ハイベア、H.L.マーテンセン、A.P.アドラー、F.C.シバーン、P.M.メラーといった主要人物たちのヘーゲル哲学との関係が考察される。

第三章では、ハイベアのエーレンスレイヤー批評を扱い、詩的ジャンル論やイロニーの統制的機能の問題を分析することで、『今なお生ける者の手記』、『イロニーの概念』、『あれかこれか』への影響を以下のように予示する。ハイベアは、詩的理念の発展段階をヘーゲル美学とは異なって、抒情詩、叙事詩、戯曲詩の順に発展すると考えたが、この美的段階論が、『今なお生ける者の手記』の規範となった。同様に『イロニーの概念』への影響は、その最終章で、「統制的されたイロニー」について論じるように、ハイベアのエーレンスレイヤー批評がイロニー理解の鍵となった。ところが、『あれかこれか』に対するハイベアの影響については、キルケゴールはハイベア美学によるヘーゲルからの逸脱を意識し、厳密にはハイベアではなくヘーゲルの美学に従うようになった。このような前提を踏まえ、第二部以下では、キルケゴールの初期テキストにおいてデンマークヘーゲル主義の影響を介したヘーゲル哲学の問題を考察する。

第四章と第五章は、シバーンのヘーゲル論理学批判とそれに関連するデンマーク矛盾論争を扱い、『あれかこれか』の刊行と同時期のヘーゲル主義論争の影響を予示する。

第六章は後期のヘーゲル主義者、A.P.アドラーの学位論文を分析し、『イロニーの概念』に対するアドラーのヘーゲル主義の影響を予示する。

本論文の第二部は、第一部の議論を踏まえて、キルケゴールの初期思想に対するヘーゲル哲学の影響を考察する。第一章は、処女作、『今なお生ける者の手記』が扱われる。この冒頭でヘーゲルの論理学が「不朽の名著」と言及されるように、初期のキルケゴールのヘーゲル論理学理解が分析される。また長編作家としてのアンデルセンへの批判が、ハイベアの『ミクラゴアのヴァラング人』の批評から明らかにされる。以上の考察によって処女作が、ヘーゲル主義的な文芸批評であり、この時期のキルケゴールは、完全にハイベアに影響され

たヘーゲル主義者であったことが結論付けられる。

第二部の第二章から第七章までは、学位論文の『イロニーの概念』が扱われる。従来『イロニーの概念』は、トゥルストルプを始めとする多くの研究者によって、ヘーゲルへの皮肉を込めた批判の書と見なされてきた。それに対して、第二部では、この論文のソクラテス解釈がヘーゲルの著作に多くを負い、ヘーゲルからの影響を否定することができないことを、さまざまな観点から論証する。そこで明らかとなるのは、『イロニーの概念』が、ヘーゲルの文献を縦横に参照し、ヘーゲルとの不一致や批判的言及を含むものの、ヘーゲルの解釈によって可能になったソクラテス理解をヘーゲル自身よりもさらに徹底しようとした、ということであった。その意味で、この学位論文でのヘーゲルに対する関係は、全体として肯定的なものであり、初期のキルケゴールにヘーゲル哲学そのものに対する批判的な意図を読み取ることはできない。

それではこの学位論文は、ヘーゲル的な思考の影響下でソクラテス理解を提示しただけの、あまり価値のない作品なのだろうか。そうではない。本論文はこの学位論文の真価を明らかにするために、ヘーゲルの解釈に対してキルケゴールのソクラテス解釈が優れている点を明らかにした。その優れた点とは、イロニーが本来、ソクラテスの生に関連付けられた個別的で内面的な規定であり、ヘーゲルの歴史哲学が看過した主体性の規定としてのイロニーのあり方が洞察されたことである。実際、キルケゴールは、雲のように把握し難いと評されたソクラテスについての理解が、ヘーゲルによって可能になり、現実化され、必然的なものになる過程を詳細に分析しながらも、ソクラテスの人格性とイロニーとの結びつきに踏み込む段になると、常にヘーゲルの見解を批判的に修正したのである。

例えば、「解釈を現実にするもの」では、それまで外的で偶然的な要因と見做されてきたソクラテスのイロニーが、ヘーゲル的な意味で人倫と衝突せざるをえないものと位置付けられ、ダイモニオンの現実化が具体的に国家の教導権との対立と化すことが跡付けられた。だがこの解釈の意義を認めた上で、キルケゴールは、ソクラテスのイロニーが、彼の個別的立場をあまりにも孤立させるために、ソクラテスにとって国家の存在は現実的にならず、国家の教導権との対立というよりも、むしろ青年達からエロスのなものを享受する手段として現れるとした。また「解釈を必然にするもの」では、世界精神の展開においてソクラテスの運命が必然的であったことを認めながらも、歴史哲学の視点では個別的なイロニーのアポリアを捉えられないことを強調したのである。

それゆえ、本論文は、キルケゴールのヘーゲル歴史哲学への支持には矛盾があるというスチュワートの指摘に対して、ヘーゲルの全体的な視野によるソクラテスのイロニーの位置付けと、ソクラテスの個別的立場からの位置付けを明確に区別した。「体系における否定的なものには歴史的現実におけるイロニーが照応する」と言うように、キルケゴールはソクラテスのイロニーを主体性の規定として捉えたが、ヘーゲル体系の内部矛盾やヘーゲル立場への批判と捉えたのではないのである。一貫してキルケゴールは、ヘーゲルのイロニー理解は人格的個別的な観点では正しくないと見なしていた。そして、この点におけるヘーゲル

の誤りの原因を、フィヒテ以降のイロニー概念に敵対するあまりに、不当なイロニーと真のイロニーを取り違えたことに見たのである。

従って、主体性の規定としてのソクラテスのイロニーに対しては、ヘーゲルのように、世界史的な視点から展望し審判を下すだけでは十分ではない。この意味でのイロニーは、ソクラテスが自らの犠牲と引き換えにしたように、世界精神の進行において、もはや主体にとって実体的生の全体的意味が妥当性を失っているものとして理解されなければならない。「イロニーの世界史的妥当性」の章で、このような仕方イロニー概念が展開される時、キルケゴールが導きとするのは、もはやヘーゲルではなく、アドラーの『孤立した主体性』に他ならない。キルケゴールはアドラーに導かれて、イロニーを主体性の規定とし、孤立した主体性を無限の絶対的否定性としてのイロニーに関連付けたのである。

しかしながら、孤立した主体は、イロニーの破壊的な作用によって主体自身を消尽し、やがてニヒリズムに陥ってしまう。それゆえ、イロニーの限りない否定的な力は最終的に統制されなければならない。そのような契機が探られたのが、最終章の「統制された契機としてのイロニー」であった。第二部の最終章では、そこで参照軸になるのがハイペアのイロニー理解であることを明らかにし、それを通してキルケゴールのイロニー概念がデンマークヘーゲル主義の正統な潮流に連なるものであることを示したのである。

以上のことから第二部は、『イロニーの概念』がヘーゲル批判の書ではなく、ヘーゲルの歴史哲学的観点とデンマークのヘーゲル主義の影響によって書かれた極めてヘーゲル主義的な作品であると結論付けたのである。

第三部では、『あれかこれか』におけるヘーゲル哲学の問題が、やはりデンマークヘーゲル主義の影響を介して考察される。まず『あれかこれか』のタイトルの意味を明らかにすることで、同時期に起こった、デンマーク矛盾論争の影響範囲が確定される。そこで明らかにされたのは、確かにキルケゴールは『あれかこれか』のタイトルからデンマーク矛盾論争のスローガンを意図的に指示したが、このタイトルの意味は、一面的にヘーゲル批判に加担するものではない、ということであった。すなわちキルケゴールは、序文で A の美的人生観と B の倫理的人生観を提示する際に、A の著者に対して B の倫理的選択を絶対的な二者択一として突きつけたのではなく、「あれかこれか」の選択がそのどちらを選べばよいのか、あらかじめ結論に達していないと説明したのであった。このような理解は、「ディアブサルマータ」のタウトロジーに関する見解からも導かれる。

すなわち、矛盾論争で議論された最高の思惟原則としての同一律の意味について、キルケゴールは、ヘーゲルを批判する見解とヘーゲル主義の見解を併存させたのである。それによって、矛盾律の原則が有効性を持つ経験的な意味での「あれかこれか」と、思弁的媒介の領域での第三項による総合の立場が区別された。この立場は倫理的著作のなかでも維持される。『美と倫理の均衡』では、ハイペアの排中律の妥当性に関する議論から思弁と自由の領域が区別されたのである。そこではヘーゲル哲学が歴史を調停する意味と歴史に対する個

人の決断の意義が区別され、最終的には、「歴史的な運動の総体から、主体の決断も必然性の支配を受けなければならない」という、ヘーゲルの歴史哲学的立場が維持されたのである。

『結婚の美的妥当性』では、ロマン的人生観を部分的に肯定し、倫理的人生観の意義を説くヴィルヘルム判事の立場が分析された。判事によれば、厳格な倫理的人生観は、カントの結婚契約説のように、「悟性結婚」に陥る限りで一面的な欠点があり、結婚制度において愛を充足することができない。美的か倫理的かの「あれかこれか」を克服するのは、すべての対立を統一する愛の弁証法なのであり、キルケゴールは「最後の書簡」のキリスト教的立場において、「あれかこれか」の対立に隠れた第三項の宗教的立場を暗示した。

以上の考察から、テキストの全体的な構造が、ヘーゲル弁証法のトリロジーに従っていると結論付けられた。

美的著作も、従来の研究によるヘーゲル美学との影響関係が全面的に見直された。トゥルストルプは、キルケゴールの理解は不十分だとして、ヘーゲル美学との影響関係の考察をテキスト解釈から完全に省略したが、第三章は、『あれかこれか』における『美学講義』の広範囲な言及を例示することで、トゥルストルプに反論した。

特に注目すべきことは、一八四一年の時点でキルケゴールが詩的理念の発展段階をヘーゲルに従ってハイペアの学説を修正した事実である。この時期のキルケゴールは、ハイペアの逸脱を指摘するほど、ヘーゲル美学に精通していた。その例が『直接的爱の段階』にある。キルケゴールは、「素材と形式の相互浸透」というヘーゲルの古典芸術の理念から出発し、デンマークの美学論争におけるエーレンスレイヤーとバゲッセンの見解を批判したのである。このようにキルケゴールは、美学論争で議論された素材と形式の問題をヘーゲル美学の立場から回答するほど、ヘーゲルの見解と一致していたのである。

『古代悲劇の現代悲劇への反照』についても、従来の研究が見直された。この著作の解釈は、ヘーゲルとの関係が比較的明瞭であるため、一般的に G.スタイナーの研究によっても知られている。しかし、我々はキルケゴールが古代のアンティゴネを現代悲劇として「創作」した観点から、スタイナーやスチュワートの解釈を見直した。すなわち、アンティゴネの役柄の変更のなかに、アリストテレスの古代悲劇の解釈が、ヘーゲルの現代悲劇の解釈において反照される構造を読み取ったのである。創作されたシュムパラネクローメノイのアンティゴネによれば、彼女は没落する運命の必然性から自己決定的な反省に移行する限りで、「悲哀」と「苦悩」の両方を経験し、「悲哀の娘」として「苦悩の持参金」を与えられている。彼女の悲劇は行動と運命の中間にあり、この中間規定を捉えるのが現代の特質としての「不安」である。

このように、現代版のアンティゴネは、ヘーゲルの『ハムレット』解釈に影響を受けており、キルケゴールは、そこから内面性における反省的な心理描写を引き出した。現代のアンティゴネが、『不安の概念』の分析に発展するように、父の秘密と恋人への沈黙においてこの物語は、父ミカエルとレギーネの関係として理解される。こうして現代悲劇として再解釈

されたヘーゲルのアンティゴネ理解は、キルケゴールの内面史上で最大の出来事を表現するものとなった。

以上のように、本論文では、デンマークヘーゲル主義からの影響作用史という視点を導入することによって、初期のキルケゴールとヘーゲル哲学との関係を全面的に見直すことができた。本論文から導かれる初期思想の重要な特質として、最後に次の三点を指摘したい。第一には、キルケゴールのヘーゲル受容がハイペアのヘーゲル主義を経由して進められ、それによってデンマーク黄金時代の文化的諸問題と結びついていたことである。キルケゴールはその時代の文化的課題に応答する所から思索を始めたのであり、その意味で文化の哲学者であった。第二には、初期のキルケゴールにとって、美学や論理学などのデンマークの諸論争は、ヘーゲル主義の立場から回答すべきものだったということである。この点において、初期のキルケゴールはデンマークヘーゲル主義者の一人に数えられる。第三には、初期と同じ仕方ではないにせよ、中期以降の実存思想もまた、デンマークヘーゲル主義との影響関係によって形成されたことである。これらの影響史的考察は、今後のキルケゴール研究にとって重要な意義を持つであろう。

以上述べてきたように、本論文のキルケゴール研究への独自の貢献は、影響史的考察という手法を取ることによって、十九世紀デンマークにおけるヘーゲル哲学の受容状況の中にキルケゴールの初期思想を位置付けたことにある。このような学術的独自性により、本論文は、キルケゴール研究に留まらず、ヘーゲル哲学の新たな影響史研究にも寄与し、さらには日本の哲学研究の新たな発展に貢献すると期待される。